

医心 伝心

研修医のそばで

富山県医師会理事 渡辺 多恵

子供達の関係やら医師会の仕事で、最近3つの大学の入学式の学長講話をお聞きしました。1つの大学では「世界に羽ばたけ」と語られ、ウンウンとうなづき、もう1つでは「日本で1番になろう」と言われ、頑張れ頑張れと聞き、もう1つでは「目の前の患者さんを見なさい」といわれ肩の力が抜けました。それぞれ少しずつ違った学習体験が積み重なっていくことでしょう。もちろん3つとも大事なのです。

大学教育を含め、それまでの年月で培われた自分の文化をもって研修医ははじまります。このとき、まずは、なりたいものになろうという計画をします。ふりかえてみても「教授になる」と叫んだ人もいたし世界の紛争地域で働く外科医になりたいといった人も、とりあえず普通のお医者さんになりたいといった人もいました。目標は到達されなくても大事なことに変わりありません。加えて女性は、研修医期間中に結婚出産したいとか、10年間しっかり研修してから35歳に結婚出産しようとか、結婚はしない、とかひそかに心しています。相手の有ることですから難事業ですが。医療技術の習得に関して私達のときは親についてるひよこ状態で、お母さんあひるのいうままだったように覚えてますが今は昔の自分達より自立しているようにみえます。パソコンログで超過勤務にならないよう病棟から定時で追い出されるそうで、とにかく調べ物は白衣のポケットのスマホに聞く

し、指導医の指導が納得いかなければ旧知の別の指導医にラインで聞くとか。

初期研修が終わった頃に、「もう大体のことはつかめた」といってのけた天才もいたし、女は入れないと教授からいわれ志望科を変えた人、なぜ入れないのかとくいついて女性第1号となった人、すぐに専業主婦になって10数年してからアメリカで医師免許をとった人、遊び人だったのに研究に取り付かれた人もおられました。自分のなりたいものと自分の資質が違っていることに気づいたり、自分がおかれた環境の中で引き出される能力というものに気づいた時代でした。自分がそれまでに持っていた文化学習と外からの要請や圧力のなかで何とか折り合いをつけようとしてきました。

研修が終わってからも同じような環境で医院を継いだ誰かれでも、その医院の場所が過疎地域だったら外科医だったはずなのに老年内科医に変貌し、若い人の多い地域では内科医が小児科医になっていました。精神科の中でもこんなに認知症の人を診ることになろうとは予想していなかったのです。自分の資質と経験学習のなかで自分らしさを作り、時代遅れになったものは脱ぎ捨て、外界との影響の間で生き延びていく、変わり続けることがずっと続きます。私も心はまだまだ研修医(見た目はおばさん)。

道を歩み始めた研修医さん達が素敵な出会いと経験に恵まれますように。